慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジ・ベ・セイの交換論
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.10 (1932. 10) ,p.1945(439)- 1970(464)
JaLC DOI	10.14991/001.19321001-0439
Abstract	
Notes	慶應義塾創立七十五年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19321001-0439

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジ・ベ・セイの交換論

增井幸雄

一

ジ・ベ・セイは經濟原論の內容を生產論・分配論・消費論の三部門に分けて說明する所謂三分法の創始者として一般に承認されて居る、と云つて差支ない。セイは、私が嘗て本誌揭載の拙稿中に於て指摘したるが如く、(1)千八百三年に公にした『經濟學』(Traité d'Économie Politique)第一版に於ては其の內容を(1)生產論・(2)貨幣論・(3)價值論・(4)所得論・(5)消費論の五篇に分けて居たが、千八百十四年に公にした同書第二版に於ては右の篇別に整理を施し、貨幣論を生產論に併せて之を第一篇生產論とし、價值論を所得論と併せて之を第二篇分配論と改稱し、消費論を第三篇に繰上げるとによつて、茲に所謂三分法を確立し、爾後同書の著者生前最終版に至るまで之を維持して變ることがなかつたのである。尤も、ボアロー(D. Boileau)が之に先つこと三年なる千八百十一年に公にした『經濟學研究序說』(Introduction to the Study of Political Economy)に於て、內容を(1)國富の性質及起源・(2)國富の增加・(3)國富の分配・(4)國富の消費の四篇に分けて居ることを見、且つ此の中の第一篇の標題に於ける「起源」は「生產」

と同義語に外ならぬとのキャナン（E. Canman）の説(2)を容れるときは、所謂三分法は、用語に於ては兎に角として實質に於ては、セイ以前にボァローによつて樹立された、との論も生まれ得る(3)。併しながら、假令ボァローの所謂「起源」が「生産」と同義語であるとしても、彼には所謂三分法に於て設けられる三個の篇の外に更に「國富の增加」なる別個の一篇が存するのであつて、形態の上から見れば明かに三分法と云ふことを得ない。或は、ボァローの所謂「國富增加篇」は「國富生産篇」の續きであると見て、形態上に於ては兎に角、少くとも實質上に於ては三分したのである、との論も立てられ得るかも知れないが、私は、斯かる無理をしてまでもボァローに三分法の發端を發見せむとするよりも、寧ろ卒直に、形態に於ても用語に於ても共に完全に備はつた三分法をセイの「經濟學」第二版に始まると做すを至當とすると考へる(4)。

然らば、セイは所謂三分法のみに執著して變ることがなかつたか、之に交換篇を加へたる所謂四分法には全然無關係であつたか。思ふに、世人は三分法との關係に於てはセイを想起することを忘れないが、四分法との關係に於て彼を想起することが餘りに少いやうである。彼が三分法を確立したことにのみ囚はれて他を思ふの暇なかりしに因るものか、或は彼の『經濟學』のみを其の主著と認めて他の著作を顧みなかつたに因るものか、或は四分法の創始者が他に存する(5)に因るものか、理由は何れであるにしても、兎に角に彼に交換篇ありや否やを考へて見ようともしない者が少くない。甚しきに至つては、セイには交換篇なしと速斷して居る學者もある(6)。併しながら、此の速斷は事實に合しない。所謂四分法なるものがジェームズ・ミルに始まると做すことには世に異論なき所であるが如くであり、又セイが『經濟學』に於ては三分法確立後は之を固執して遂に交換篇を設けることなかりしことも事實であるが、彼が千八百二十八年から九年に掛けて公にしたる『經濟學講義』（Cours Complet d'Économie Politique Pratique）に於ては明かに交換篇を設けて居ることも事實たるのである。同書は(1)富の生産・(2)經濟學原理の各種產業への應用・(3)交換と貨幣・(4)社會經濟に及ぼす制度の影響・(5)社會に於ける所得分配方法・(6)人間の數量と境涯・(7)社會に於ける消費・(8)財政・(9)補論の九篇に分たれて居り、交換論は其の第三篇に据えられて居るのである(7)。

セイの交換論に於て取扱はれて居る事項は大體に於て三大部分に分たれ得る。第一は交換そのものを取扱ふ部分であつて、それは『經濟學講義』にあつては第三篇第一部に收められたる五個の章、『經濟學』にあつては第一篇第十五章、第十六章、第二十一章の劈頭、並びに第二篇の最初の三章、『經濟學問答』（Catéchisme d'Économie Politique）にあつては第十六章に於て展開せられて居る。第二の部分は貨幣を取扱ふものであつて、それは『經濟學講義』にあつては第三篇第二部に收められたる第六章乃至第十六章の十一章、『經濟學』にあつては第一篇第二十一章乃至第二十九章、『經濟學問答』にあつては第十二章に於て述べられて居る。而して第三の部分は貨幣の代表記號即ち手形を取扱ふ部分であつて、それは『經濟學講義』にあつては第三篇第三部を占むる第十七章乃至第二十一章の五章、『經濟學』にあつては第三十章、『經濟學問答』にあつては第十三章に於て說述されて居る。本篇に於ては右第一の部分に展開されて居るものを主とし之を補ふに他の關係個所に散在する意見を以てして其の要領を考察して見よう。

（1）三田學會雜誌、第二十卷第二號、一―二頁。

（2）Cannan, Theories of Production and Distribution, 1920, IIIa ed., p. 33.

（3）理由は違ふが兎に角ボァローを三分法の始めとする意見の一例を故福田博士に見る。曰く「キャナン氏の『生産分配學說史』と云ふ本にはセー氏は其の書の第二版に至つて始めて三分法を取つたとして此點に重きを置いてあります。若し左樣とするとボァローの方が先きになる譯であります」と。但し、博士は直ちに語を繼いで「併しセーは其の第一版に於て編こそ分ちませんでしたが、內容は三分したので、ボァローは其をヤコブから更らに採引したに過ぎないのであります。」とてセイの爲に辯じて居る。（『經濟學原理』總論及生產篇、改造社「經濟學全集」第二卷、二〇五頁。

（4）高橋誠一郎教授は、セイの『經濟學』第二版に至つて明確に三分の法が採られた旨を明記せられて居る。（『近世經濟學史』上卷、一八六―七頁。）

（5）ジェームズ・ミルが四分法の創始者と認められて居る。彼は Elements of Political Economy, 1821. に於て（1）生產論・（2）分配論・（3）交換論・（4）消費論の四篇別を立てた。

（6）福田博士は其の一例である。博士曰・「今日のやうな經濟學の分類を立てた始めの學者たるヂャン・バチスト・セーは交換と云ふ特別の部門を認めませんで、富の生產分配及消費と云ふ三つに分けて居ります。之に交換論と云ふのを加へたのは英國のジェームス・ミルであります」と。

（7）『經濟學講義』に於ける九篇別の中で、實質的に見れば、第二篇と第四篇とは共に第一篇の應用論又は續論であり、第六篇は第五篇の續きであり、第八篇は第七篇の一部と見られ得るから、同書の篇別方法は大體に於て生產・交換・分配・消費の四分法に整理せられ得ることは注目すべきである。

二

セイの交換論に於て注目を惹く所のものの一つは、彼が交換は財と財との交換であることを强調して居る點である。文明社會に於ては交換は普通には財と貨幣との間に行はれるのであつて、それは、貨幣を與へて財を受取る購買と、財を與へて貨幣を受取る賣却との形態を取る。然るにセイは、此の貨幣なるものは交換の終局的目的物（terme）にあらずして、單に交換の要具（instrument）に過ぎずとする。換言すれば、商品を賣つて得たる貨幣は他の商品の買入の用に供せられるのであり、貨幣は賣りし商品と買入るべき商品との交換の媒介物に過ぎずして、交換は商品と商品との間に行はれるものである、とする。貨幣なき時代に於て物々交換の行はれる場合は勿論、貨幣の使用せらるゝ時代に於ても、眞實は商品と商品との交換が行はれるのであるとするのである。此の意見は彼の有名なる市場理論（Théorie des débouchés）中に於て確立せられて居る(1)。即ち彼は、『經濟學問答』に於ては第十一章「交換及販路に就て」の劈頭に於て、「交換とは如何なるものなりや」との設問に對して、「交換とは一人に屬する一物件と他の一人に屬する他の一物件との交易（troc）なり」と答へる。然らば「賣却と購入とは交換なりや」との設問に對しては、「賣却は或る額の貨幣に對して自己の商品に就て行ふ交換なり、購入は商品に對し自己の貨幣に就て行ふ交換なり」と答へて居るが(2)、次で商品の賣却の目的如何との設問に對して、そは此の得たる貨幣を他の商品の購入に使用せむとするに在りと答へ、之より結論して、賣却も購入も眞實に於ては生產物の交換に外ならず、人は賣る所の、欲望を有せざる生產物を、買ふ所の、使用せむと欲する生產

物と交換するなり云々と述べて居る(3)。又『經濟學講義』に於ては、「分業は生産者をして自己の生産物の一部分以上を消費すること能はざらしむるを以て、彼等は是等生産物の適當し得る消費者を求めざるを得ざるに至る。彼等は商業上の術語に於て販路と呼ぶ所のもの、即ち自己の欲するものと自己の創造せるものとの交換を遂行するの手段を發見することを要す。」「此の手段は何物より成るや？　人或は慌しくそは貨幣なりと答ふべけむ。予は之に同意す。而も予は敢て問ふ、此の貨幣は買はむと欲する人々の手中に如何なる手段によりて到達するや？他の生産物の賣却によりて獲得せらるることを要するにあらずや？　買はむと欲する者は先づ賣らざるべからず、而も彼の賣り得る所のものは彼の生産したるもの又は人の彼の爲に生産したるもの以外に出づること能はず。」「人の生産物を買ふや生産物を以てするものなり」(4)と述べて居る。彼は「日常生活上の取引は、是等の取引を總べて商品の物々交換に外ならざらしめ通貨をして一時的の役目を行ふに過ぎざらしむる所の、交換の理論に關聯するものなり」(5)とするのである。多くの著者の所謂交換論に於ては財の賣買、即ち一方的移動を示して相互的交換の印象を強く與へざるに反し、セイに於ては文字通り財の相互的交換なることを強く印象せしめて居る。

(1)　市場理論は『經濟學』に於ては富の生産にとつて有利又は不利なる事情の一として取扱はれて居つて第一篇（生産篇）第十五章に於て、又『經濟學講義』に於ては生産物の販路に大小あらしむる原因として取扱はれて第三篇（交換篇）第二章に於て展開されて居る。更に『マルサス氏に與ふる書翰』(Lettres à M. Malthus, 1820)に於ては全巻を擧げて此の問題を取扱つて居る。拙稿「生産消費の均衡に關する論爭」（本誌第十九巻第四號所載）參照。

(2)(3)　Catéchisme d'Économie Politique. (Œuvres Diverses de J.-B. Say, p. 41)

(4)　Cours Complet d'Économie Politique Pratique, IIIe Partie Ch. II. (Édition Bruxelles, p. 159-60.)

(5)　op. cit., IIIe Partie, Ch. 4. (p. 167.)

III

セイが交換は生産物と生産物との間に行はれるとすること右の如くであるが、一方で彼は生産物又は富は價値より成るとする(1)。從て彼の說は、之を換言すれば、交換は價値と價値との間に行はれる、と云ふに在ることとなるのであるが、此の價値は如何なる割合で交換されるとするのであるか。此の點に關しては、セイの當時までに二說あつた。第一は互に等しき價値が交換せられると做すもの、第二は小なる價値を與へて大なる價値を受取ると做すもの、即ち等しからざる價値が交換せられると做すものである。前者は當時まで寧ろ一般的に行はれたものであつて、ケネーによつても採用されたのであるが(2)、後者は此の意見に反對してコンディヤック（Condillac）が發表して居る所である。然るにセイは第一說を執つて第二說に反對して居る。其の意見は、商業の生産的なる所以を論ずる箇所に(3)於てコンディヤック說に對する批評中に表はれて居る。

コンディヤックの云ふ所は次の如くである。「抑、吾人は商人に何物を負ふや。若し世人の想像するが如くに吾人が常に等價値の生産物を等價値の他の生産物と交換するものなりとせば、交換を幾倍するも效なかるべし。事前に於ても事後に於ても常に同量の價値又は富を存することとなるべけむ。」「されど、交換に於て人が等價値に對して等價値を與ふと云ふは誤れり。反對に、各契約者は常に大なる價値に對して小なる價値を與ふるなり。」「若し人が

常に等價値に對して等價値を交換したりとせば契約者の何れにとりても何等利得する所なかるべし。然るに双方ともに利得す、或は利得すべき筈なり。其の理由如何。曰く、物は吾人の欲望に相對的なる價値を有するのみ、欲望は一方に對しては大にして他方に對しては小なり、相手方の場合も亦同じ。」「利益は相互的なり」(4)と。

然るにセイは此の不等價値交換說を誤れりとする。彼は『經濟學』に於てコンディヤックを評して云ふ。「コンディヤックは、總べての商品は、之を賣る者に對しては之を買ふ者に對してよりも價値小なるも、そが前者より後者の手に移ることによつて價値の增加を來す、と主張せり。されど、販賣とは一商品を與へて其の代りに他の商品例へば貨幣を受取るの交換なるが故に、契約者の各々が是等二物中の一方に就いて蒙る所の損失は彼が他方に就て收むる利得を相殺すべく、斯くして商業によりて生産せられたる價値なるものは社會に毫も存することなかるべし。故にコンディヤックの主張は誤れりと云はざるべからず。……常に賣手が狡猾を事とし買手が欺かるゝ者の役目を演ずるにあらざるを以て、『若し常に等量の價値を交換するものなりとせば契約者にとつては何等利益する所なかるべきなり』とのコンディヤックの言は理由なき所と云はざるべからず」(5)と。セイにあつては、價値等しき二個の生産物を交換するの可能性は常に存するとせられ、若し自由に是等を交換すること能はずとせば、是等の生産物は正確に價値等しきにあらずとせられるのである(5a)。

兩說の分れる根本は何れに在るか。コンディヤックは、世人が自己と反對の意見を抱懷するに至つた理由を示して云ふ。世人の此の點に關して陷る誤謬は、商取引中に存する物に就て恰もそれが絶對的價値を有するかの如くに云爲すること、並に、從つて交換を行ふ人々は等價値に對して等價値を互に授受することが正義に合すると判斷することから來る。世人は、兩契約者が大なる價値に對して小なる價値を與へることを注意するどころか、之を毫も反省することなくしてそは有り得べからざる事柄なりと考へる。一人が常に小を與へる事實あらむが爲には他方が常に大を與へる程に欺かれ易き人物たることを必要とするが、斯くの如きは想像だもすること能はざる所に屬する、と思惟するのである(6)、と。此の見解はセイの場合には當つて居る。コンディヤックの云ふ價値とは主觀的の價値であるが(7)、セイの云ふ價値は、嘗て指摘したるが如く(8)客觀的なる交換價値である。主觀的價値の點から見れば、双方ともに小なる價値を與へて大なる價値を受取るものなることは明白であつて、此の點は、交換が自己に必要なきものを與へて必要なるものを受取るものなること、欲望の大小が效用の大小を來すこと、效用の大小が價値の大小を來すことを認むる(9)セイに於ても否認し得ざる所であらう。唯、セイは主觀的價値を效用に外ならずとし、價値とは交換價値のみに限ると做して居るが故に、右の命題を是認し得ないのみである。セイの立場からすれば、二つの等しき價値と價値とが交換されることは當然である。蓋し、詐僞も不正も强制もなく、正當に自然に行はれたる交換に於ては、交換兩當事者は自利の點から見て受くるもの以上を與へざらむとするからである(10)。

（1） Traité, Liv. I, Ch. I.

（2） ケネーに次の一句がある。“....le commerce n'est qu'un échange de valeur pour valeur égale et....relativement à ces valeurs il n'y a ni perte ni gain entre les contractants.” Quesnay, Œuvres Economiques et Philosophiques, par

Oncken, p. 538.

(3) Traité, Liv. I, Ch. 2; Cours, IIe Partie, Ch. XIII.

(4) Condillac, Le Commerce et le Gouvernement, Ie Partie, Ch. 6. (Œuvres Complètes, 1821, Tome 4, p. 41-2.)

(5) Traité, Liv. I, Ch. 2. (VI. Ed., p. 63-4.)

(5) Traité, Épitome, art. Échanges.

(6) Condillac, op. cit, p. 44

(7) コンディヤックに次の言あり。"On dit qu'une chose est utile lorsqu'elle sert à quelques-uns de nos besoins...D'après cette utilité, nous l'estimons plus ou moins....Or cette estime est ce que nous appelons valeur." (op. cit, p. 8.)

(8)(9) 本誌第十九巻第十一號、五三頁。

(10) Cours, IIIe Partie, Ch. IV. (p. 167-8)

四

若し交換にして互に等しき價値の間に行はれるものなりとせば、交換は果して如何なる利益を與へるか。それが社會の經濟に於て占める位置又は演ずる役割は如何なるものであるか。

此の點に就ては、セイは先づ第一に、交換は富に増減を來すものにあらざることを指摘する。「相等しき二個の價値に就て行はるゝ交換は、社會に存する價値の總額を増加せしむることなく、又減少せしむることもなし。相等しからざる二個の價値の交換（即ち交換者の一方が他方を欺く場合の交換）も亦、假令一方の資産より奪ふ所のものを他方の資産に附加することとなるとは云へ、社會の價値の總額には何等の變化をも來さしむることなし。交換せらるゝ二個の物件は、爲に從前に比して價値を増すこともなく、又之を減ずることもなし」(1)と。但し、此の事は、セイが賣買と云ふ交換を業とする商業を不生産的なりとすることを決して意味するものではない。セイにあつては、交換は商業の本質を構造するものでない、商業の本質を構成するものは物を効用少き所から效用多き所に齎らす運送に外ならない、商業は交換によつて生産せず、運搬によつて生産すとせられて居る(2)。又彼は、交換は社會の經濟に於て根本的の事實たるにあらざることをも指摘する。曰く「人は各々自己の生産する所のものの極めて小部分を自家用として留保するに過ぎずして、社會に於ける生産物の最大部分、否、殆んど全部は、交換の結果としてのみ消費せらるゝものなり」との事實に基いて「世人は交換を以て富の生産の根本的基礎たりと信じたるも、そは誤りなり。交換は附たりに行はれるに過ぎず。此の事は、各家族が其の消費物件の全部を生産する場合には、假令何等の交換の行はるゝものなくとも社會は立ち行き得べきに徴して明白なり」(3)。「若し各人が自己の必要とする一切の生産物を創造し而して之を消費するものとせば、本來の意味に於ける交換なるものは一も存することなかるべきなり」(4)と。

然らばセイは交換の役割を如何なる點に認めるか。彼は之を、交換が分業を可能ならしめるの點に認めて居るのである。即ち云ふ。「各人は共の欲望が彼をして消費せむと欲せしむる生産物の全部を創造すること能はず。嚴密に云へば、若し生産の一切の要素を所有せば此の事も可能なるべきも、斯くせば多大の不利を伴ふこととなり、生産

せらるゝ物の分量は使用せらるゝ手段に比して頗る僅少となり、從て自己の配慮を以て自己の家族の最も緊要なる欲望に應ずべきものを取得すると能はざるべし。蓋し、若し食料品の生産に沒頭するとせば、布の製作に無知たるに至らむ。……單に社會の諸職業を修得せむが爲には一生涯を以て足れりとせざるのみならず、一の事業を行ひつゝある間は他の事業に適する材能と資本とを無爲に放置するを要すべきを以てなり。……職業分岐の因て來る所は即ち斯くの如し。……此の故に、人は交換によりて自己の必要とする物を獲得するを要す。自己の消費し得る物例へば小麥を生産する人々すらも自ら之を消費し得るは一部分に過ぎず、家具又は衣服を得むが爲には交換に依ることを要するなり。此の一事は、交換が社會の經濟に於て演ずる大なる役割を吾人に示す。交換の便宜あるに因りて、各人は自己の生産手段の許す限り何處までも僅かに一種の生産物の製作を推し進むることを得、此の生産物を以て自己の家族の維持に必要なる一切のものを取得するを得るなり」(5)と。

(1) Traité, Epitome, art Echanges. 此の意見は、交換は等價値間に行はると做す意見から當然に生ずるものである。

(2) Cours, IIe Partie, Ch. XIII. (p. 142.)

(3) Traité, Liv. I, ch. 21.

(4) Traité, Epitome, art Echanges.

(5) Cours, IIIe Partie, ch. I. (p. 159.)

五

交換の可能性はセイの所謂承認せられたる價値の觀念に導き、從て價格及び時價（prix courant）の觀念に導く。

セイに據れば「物の價値とは物の値する所のもの」即ち「吾人が此の物と交換に取得し得る所の評價可能の他物の分量」(1)を云ふ。然るに文明社會に於ては、「一物と交換に取得せられ得る評價可能の他物中に貨幣がある」。「人が一物を得むが爲めに與へむとする貨幣の分量、之を其の物の價格と名ける」(2)。而して「若し物の所有者が之を手離さむと欲するに當て其の價格を獲得し得ること確實なる場合には、此の價格をば、與へられたる時・處に於ける其の物の時價と云ふ」(3)。時價は價値の現代的にして而も現實的なる形態に外ならない。セイは此の時價が如何やうにして決定されるかを說明する(4)。說明は、供給量を任意に增加せしめ難き商品の場合にも及んで居り、時價又は其の最高限度が政府の手で定められる所謂公定價格にも言及して居るが(5)、主たる部分は任意に生產額を增し得る商品の時價が自然的に決定される場合の考察に充てられて居る。今、考察を後者の範圍のみに限定して之を見るに、需要供給の理によつて說明して居ることは平凡であるが、而も幾分か現代的のものとは趣を異にして居る所があり、又當時の通說から見て幾分か注目に値する所もある。

セイは一方に於て供給の側の事情を說明する。抑〻供給量とは其の供給が形式的に表明せられたる分量と云ふのみにあらず、其の現在の所有者が他の商品と交換に讓渡せむとする意思ある商品の分量を指すのであるが(6)、此の分量は如何にして定まるか。それは價格に反比例して定まる、と彼は云ふ。彼は、世人が物は供給少きほど高價にして供給多きほど廉價なりと云ふのみにて、供給量も需要量も共に物の價格の原因たらずして其の一結果たるとに注意せざる旨を指摘したる後、「交換に於て人は物を低廉なるが故

に多量に供給する」と云ふ(7)。而も彼は、此の分量は生産費によつて制限されるとする。此の事は、需要の増大に伴つて生産量を増し供給量を増すほど益々生産的勤労の時價の騰貴によつて生産費が高まり遂に引合はなくなるとの說(8)からも證明され得るのであるが、彼は別に、二個の生産物の交換の割合が變化すれば、之が爲に有利となつたものは生産費が下り不利となつたものは生産費が高まつたと同一の結果になるから、生産は前者に於て擴大され後者に於て縮少され、結局兩者が舊の割合に復歸するに至る旨を述べて(9)、供給量に對する生産費の制限作用を說明して居る。

次に需要の側の說明を見るに、彼は需要量即ち各物件が人の之を取得し得る價格に於て需要せられ得る分量は、各物件の效用と生産費と富裕の程度とによつて定まるとする。即ち、消費者各個人の需要量は各自の生産量即ち他物に對する消費能力以上には出で得ないのであるが、各自は此の消費能力の下に欲望の强弱に應じて即ち效用の大小に應じて消費上の等級別(10)を定めるから、茲に各種物件に對するそれ〴〵の需要量が生ずることになる。此の需要量は生産費の高低によつて、即ち價格の高低によつて反對の方向に變動する。價格が高まれば欲望等級上に於て下位に下つて需要量が減じ、價格の低落は需要量の增加を來す。而も社會成員の資産狀態を見るに、小數の大資産から多數の小資産に至るまで其の間に微細なる差を有するのであつて、之はピラミッドを充塡する多數の垂線に比較し得る。若し水平線を以て生産費の額を示すとせば、此の水平線に達する垂線の數は此の價格に手を出し得る資産の數、從つて此の生産物の消費者の數を表はすことになるが、此の水平線が高いほど此の生産物の需要者たり得る資產の數は減少し、前者が低いほど後者の數を增す。今、一國の資産が一般に僅小であるとすればそれは低いピラミッドで表はされ、小資産が多く大資産が少いとすれば斜邊は凹形となり、中庸の資産が多く極端な資産が少ければ斜邊は凸形となる。而して此のピラミッド形の如何によつて同一の水平線に達する垂線の數、即ち需要者の數が變動する、と云ふのである(11)。

然らば、一定の價格に於ける需要と供給とは果して分量に於て適合を得るや否や。セイは之を肯定する。曰く、「一國に於ける一切の個人が、生産物の或る價格の場合に消費し得べく又消費せむと欲する一切の數量を集むれば、茲に此の國民が右の價格にて需要する此の生産物の總量を得。而して此の國民の爲めに生産せらるゝ分量は右國民の需要する數量と自然的に比例す」(12)と。其の理由如何。彼は之を例を以て次の如くに說明する。即ち、今佛蘭西に於て一斤に付き六十フランの價格で一萬斤のサフランの需要があるとすれば、生産され供給されるサフランの分量は正に一萬斤であるであらう。其の理由は容易に了解される。若し六十フランの價格に於ては一萬斤しか買はぬとすれば、佛蘭西國民はサフランの消費には六十萬フランしか割くことを欲しないのである。從つて、若し供給が一萬二千斤に達したとしたら、右の六十萬法に對して此の一萬二千斤を與へなければならなくなる。即ち生産費は一斤に付き六十フランを要したが、之を五十フランで與へなければならなくなり、茲に損失を來す。反對に、七千五百斤しか生産されなかつたとしたら、佛蘭西人は之に對して六十萬フランを與へ得るのだから、價格は一斤に付き八十フランとなり、生産費を超ゆること二十フランとなる。而も、前者の場合に於ける損失は供給を一萬斤に達

するまで減少せしめ、後者の場合に於ける利益は供給を一萬斤に達するまで増加せしめるの刺戟となる。斯くして需要と供給とは其の均衡を得るに至る(13)、と云ふのである。

(1) Traité, Epitome, art Valeur (des choses).

(2) op. cit, Liv. I, ch. I.

(3) op. cit, Liv. I, ch. I.　セイは、價格及び時價を斯く定義するも、それは生產物相互交換說を捨て去ることを意味するにあらざる旨を斷つて居る。「疑もなく、一物の時價は、人が之を交換に提供する場合に獲得し得る各生產物の分量より成ると云ふを一層正確なりとせむ。されど予は、諸交換に要具として役立つ所の一生產物を選ぶことによりて複雜なる思想を單純化し、時價五フランなる一生產物は五フランを以て人の買ひ得る一切の物の價値と等しき價値を有する生產物なり、と云はむことを寧ろ選ぶものなり。一般的の用語が普人を誤まれる概念に導かざる場合には、予は一般的の用語を選ぶ」と。(Cours, IIIe Partie, ch. 4. (p. 166.))

(4) Traité, Liv. II, ch. I; Cours, IIIe Partie, ch. 4　セイは或る個所に於ては「同一の場所、同一の瞬間に於ては二つの時價あることなきは、恰も同一商品に對して二つの重量、二つの尺度あることなきに同じ」と云つて居るが(Cours, IIe Partie, ch. 13,(p. 143.))、時價を論ずる章中に於ては「世人は、特定品質の珈琲の價値は百斤に付き百七十フラン乃至百七十二フランなりと云ふ。實際に於ては常に時價の表示中に幾分の僅少なる幅(latitude)あり」と云つて居る。而して其の理由としては、契約者の双方の地位より來る輕微の價格差が存すること、即ち、取引の成立を一層多く希望する者は然らざる者よりも一層多く支拂ふか又は一層少く受取るの已むなきに至ることを擧げて居る。(Cours, p. 166-7.)　思ふに之は「同一の時處」なる語を同一日・同一都市内と云ふが如くに寬大に解したものであらう。併し「問題を簡單にする爲に、時價を相場の最高率と最低率との平均價格なりと假定」して、それが如何やうに決定せられるかを考察して居る。

(5) Cours, loc. cit.

(6) Traité, loc. cit

(7)(9) Cours, loc. cit. (p. 167.)

(8) Cours, loc. cit. (p. 171.)

(10) 之は略〻 Alfred Marshall の所謂 demand schedule に相當する。

(11) Cours, loc. cit. (p. 168-9.).

(12)(13) Cours, loc. cit. (p. 170-1.)

六

時價が所謂需要供給の法則によつて決定せられるとして、然らば其の時價は如何なる程度に定まるとするか。思ふに、時價が頗る低ければ、需要は多大に增すが生產者は損失を免れむが爲に生產額を減ずるから、此の頗る低い價格に於ては需給の量的均衡は得られない。反對に、時價が頗る高ければ、生產者は利益に驅られて生產量を增すが消費者は需要を減ずるから、是れ亦需給の量的均衡は得られない。需要と供給とが恰も量的均衡を得るのは如何なる程度の價格に於てであるか。此の點に關するセイの意見は如何。私は嘗て「價値論上に於けるセイの地位」を論じたる際に、セイに於ては價値の發生は效用に基づくが其の分量は生產費に等しくなるとせられて居る旨を述べたが(1)、時價とは一定の時處に於ける商品の貨幣的評價額に外ならないから、セイの右の意見を以て私の右の問に

對する答とすることが出來る譯である。併しセイは、右の問に答へるに別個の方面よりの立論を以てして居るから、以下その大要を見よう。

セイは先づ二商品の相對的價格（cherté relative）即ち交換比率の概念を持ち込んで來る。曰く「二商品の時價が、人の或る貨幣額を以て買ひ得る双方の分量を示す以上は、時價は吾人が同一金額を以て取得し得る双方の分量を示す。例へば、若し小麥百斤に付き十二フラン、サフラン一斤に付き六十フランなりとせば、六十フランてふ同一の金額を以てサフラン一斤又は小麥五百斤の何れにても無差別に買ひ得ることとなる。同額に對して買ひ得る諸商品の分量間に於ける此の割合は商品の相對的價格を示す。右の例に於てサフランは小麥の五百倍だけ高價なり……」と。然らば此の相對的價格即ち交換比率は如何にして定まるか。セイは、それは生産費の割合で定まるとする。即ち云ふ。「人が同じ價格を以て供給し得る二商品の分量即ち其の各自の價格の差額を構成する所のものは、同じ生産費を以て生産し得る一方及び他方の分量なり。小麥五百斤に對してサフラン僅に一斤を與ふるは、サフラン一斤は栽培・收穫・市場への運搬の爲に小麥五百斤と同額を要するに因る。予は玆に同額を要すると云ふ。蓋し、若し前者にして費用を要すること後者よりも少しとせば、人は自ら小麥を栽培することによりてよりも、サフランを栽培することによりて小麥を一層廉價に取得し得ることとなるべきを以てなり。若し例へば、サフラン一斤の費用が五十四フランに過ぎざるに小麥五百斤の生産費は六十フランに上るものとし、而も兩商品の是等兩分量が互に交換せらるゝものとせば、人は僅に五十四フランの費用を以て小麥五百斤を取得し得ることとならむ。然らば斯かる有利なる投機を行はむが爲に世人はサフランの栽培を增し小麥の栽培を減じ、遂に兩者それ〴〵の供給せらるゝ分量が同額の費用を要するに至らむ。獨り此の時に至つてのみ、是等の生産物中の一を他よりも選び生産するを利ありとすることなきに至らむ」(3)と。

右の説明だけでは、物の時價の割合が生産費の割合と等しくなると云ふことを示すのみであつて、未だ之を以てしては時價が生産費と等しき程度に定まると做すものと云ふことを得ない。然るに、セイの意味する所が前者に止まらずして後者にまでも及んで居るものなることは、幾多の個所に示されて居る。即ち其の第一は、右の説明の後を受けたる次の一句である。曰く「故に、物が偶然に其の生産費よりも大なる又は小なる價値を有するときは、此の物は不自然なる價格（prix forcé）に在るものにして、此の不自然なる價格は絶えず其の平準を恢復せむことに傾く。」「以上の所言は、猶、吾人が二生産物の交換を行ふとき、眞實に於ては吾人は其の生産費を交換するものなることを示す。吾人が吾人の與ふる生産物の分量と費用に於て等しき分量の生産物を要求するは、吾人が小を得むが爲に大を與ふることなからむことを利ありとするを以てなり」(4)と。其の第二は、生産物の本源的價格即ち原價（prix originaire, prix d'origine）を取扱ふ次章に於ける次の敷行である。曰く「生産と呼ぶ交換（筆者云ふ、生産的勤勞を與へて生産物を受取るの交換の意なり）に於て、生産物の費さしむる所のもの即ち生産費は、之が原價を、即ち物が初めて世に現はるゝときに要する所のものを構成す。」……然るに「……此の原價は永久に一定せるものにあらずして、生産費の變動するにつれて變動す」(5)。……「而も注目に値することは、原價即ち生産費と、通例そ

の變動に追隨する時價とは、同時に一切の生産物に對して低落し得ることなりとす」(6) と。第三は、同じ章中に於て生産費低落の結果を論ずる部分の中に見出される次の一句である。曰く「社會は原價に於て獲得する生産物によりてのみ生存す。然るに、人は何を以て此の獲得を爲すや。……生産基本より生ずる生産的勤勞を以てす……。吾人が生産物を創造することによりて直接に之を獲得するとも、將た又、交換によりて間接に獲得するとも、結果は即ち同樣なり。若し自ら生産すとせば、同量の勤勞を以て等しく一層多量の生産物を取得す。交換によりてなりとも、同量の勤勞を以て等しく一層多量の生産物を取得す。何となれば、二生産物を交換するに當て、吾人は眞實に於ては是等生産物を生む所の生産的勤勞を交換するものに外ならず、而も人は一物と交換してそれの要したる生産的勤勞よりも多大のものを與ふべく强ひらるゝことと決して是れなきを以てなり」(7) と。

更に吾人は、交換篇を去つて生産篇に遡つて見ても、同樣にセイが價値は生産費と等しくなると做すものなるとの證據を見出す。『經濟學講義』第一篇第九章に於て、「以上吾人は生産物の價値が生産費と等しくなる場合を假定したるが、そは斯かる場合が最も簡單にして且つ最も頻繁なるに基づく。蓋し、若し一企業が利潤を含めたる費用以上を與へ、同種の他の企業よりも多大の利潤を與ふとせば、生産者は之に殺到し來り、其の生産物は多大の競爭を蒙りて價値低落し、遂に生産費以上の價値を有せざるに至るべきを以てなり」(8) と云つて居ると共の一である。又、同じ章中に「生産費とは何ぞや。生産的勤勞の時價なり。」「交換の行はれむが爲には、破壞せらるゝ一切の勤勞の價値が生産物の價値と均衡を保つことを要す。若し此の條件にして充たされずんば、交換は不平等たりしなり、生産者は受けたるよりも一層多くを與へたるなり。」「されど、生産物の價値にして生産的勤勞の價値と等しくなりたりとせば、生産者は完全に賠償せられたるなり、彼等は與へたると同じだけを受けたるなり。若し企業者をして諸生産者を代表せしむとせば、彼の生産物は彼の生産費全體を支拂ひしなり」(9) と云つて居るのは其の二である。

斯くの如くに見來れば、セイを以て價値論上に於て生産費を重視せざりしものと做す論(10) は之を承認することを得ないのである。

（1）三田學會雜誌第十九卷第十一號六一―六七頁。玆に注意すべきは、生産費とは企業者の利潤を含んでの意味であると云ふ一事である。蓋し、企業者の勤勞は生産の行はれる爲めの一要素であり、それは評價せられて時價を持つとせられるからである。此の點に就ては、右の論文及び本誌第二十卷第二號、拙稿「セイの分配理論」九頁の註(1)を併せ參照せられ度し。

（2）（3） Cours, IIIe Partie, ch. 4. (p. 167-8.)

（4） Op. cit. (p. 167-8.)

（5） Cours, IIIe Partie, ch. 5. (p. 172.)

（6）（7） Op. cit. (p. 174.)

（8）（9） Cours, Ire Partie, ch. 9. (p. 56.)

（10） 英國及び佛蘭西の經濟學者に於ける價値論の發達を研究して居るテュルジョン (Charles Turgeon et Charles-Henri Turgeon) が「セイは効用を詳論したれども生産費に就ては殆んど云ふ所なし……『講義』中に於て偶ゝ顯はれ其の要

したる骨折に比例してのみ支拂を受くと指摘して之に言及したれども、こは物の數ならず」とか、「『經濟學』初版に於ては生産費を價値構成に貢献する一根本要素として示したれども其の思想を展開せしむることなかりき」とか云つて居るのは當らない。(La valeur d'après les économistes anglais et français depuis A. Smith et les Physiocrates jusqu'à nos jours, 1921, p. 383-4.

七

交換は、セイに據れば、生産物の生産費と等しい程度の時價に於て始めて需給が量的に均衡を得て有效に成立する。而も交換が社會の經濟の上に於て演ずる役割の至大なること前記の如くであるとすれば、交換の促進せられ擴大せられむことは最も望ましき所とせられなければならない。此の交換の促進は果して如何なる場合に實現せられ得るか。セイは斯かる效果ある事情數個を擧げて居る。

其の第一は交換への貨幣の介入といふことである。セイは、生産物と生産物との直接的交換に伴ふ不利困難を指摘して云ふ。「若し是等の交換にして物々交換の方法により行はれざるを得ざるものとせば、吾人の社會を構成する種々の人々にとりて、即ち概ね單に一種又は多くとも僅少なる種類の生産物に於て生産者たるに過ぎざるにも拘らず、最も貧しき人々の場合に於てすらも各種無數の生産物の消費者たる是等の人々にとりて、自己の生産する所のものを自己の欲する所のものに換へむことは如何に困難なるべきや」(1)。「各人の欲望が多種多量に上り生産的勤勞が多數者間に分割せられ居れるが如き頗る進歩せる社會に於ては、交換は其の必要更に大となり、益々複雜を加へ、從て物々交換の方法によりて交換を完了せむことは益々困難となる」(2)と。彼は交換の當事者中の一方の提供する物が相手方の欲望と一致せざる場合を擧げて右の困難を例證する。然るに貨幣を交換の媒介物として使用するに至れば此の困難は容易に避けられる。「即ち、若し消費に必要なる一切の生産物と交換せらるゝことの容易なるが爲に世人の求むる所となるが如き商品ありとし、人の之を與ふる分量をば其の取得せむとするものの價値と正確に比例せしめ得るが如き商品ありとせば」、人は先づ此の商品を獲得することに努めるであらう。何となれば、經驗は、斯かる商品を以てすれば今一回の交換により必要とする一切の消費品を取得し得ることを教へたからである(3)。斯くして、貨幣の使用は、物々交換によつては不成立に終るべき交換をも完全に成立せしめる。

第二は社會全般に於ける生産物の增加といふことである。貨幣の使用が交換を促進するとせば、一見、貨幣の存在量の大小は交換の分量の大小を來すが如くに思はれるが、セイは市場理論に於て交換又は販賣の容易に行はれざる理由を貨幣の缺乏過少に歸せしめる俗間の思想を誤まりとし、生産物は生産物と交換せられるものであり、貨幣は此の交換せらるゝ生産物の價値を一方から他方へ運ぶ車の役目をするに外ならないから(4)、他の生産物の生産量の多いほど益、販賣は容易となるとする。セイは、市場理論から導き出した推論の第一に於て云ふ。「何れの國に於ても生産者の數の多きほど又生産物の生産額多大なるほど、販路を見出すことは益、容易となり、其の方面は益、多岐に亙り、其の範圍は益、擴大せらる」(5)と。蓋し、生産多き所にこそ購買の資力が創造されるとするからであり、而も生産を完了したる生産物は其の瞬間から其の價値の全額だけ他の生産物に對して販路を提供するものなり

とするからである(6)。彼は此の點を說明せむが爲に、農・工・商業間に於ける經濟的連帶關係を說いて居る(7)。市場理論からの第二の推論として各人間・各産業間・各地方間に於ける經濟上の連帶關係を說明して居る所も(8)實は右の敷衍に外ならない。茲に生産物の增加なる語は、之を他國に對する一國のみの立場から見れば、輸入を其の中に包含せしめることが出來る。然るに、輸入は其の代償として輸出を伴ふ。蓋し、正金を以て一國から他國に支拂ふ場合と雖も、其の正金を得る爲には豫め外國に商品を賣つて之を取得し置くの必要があるからである。從て輸入の增大は輸出を助長することになる(9)。之はセイが市場理論からの第三の推論として述べて居る所である。

第三は文化の向上である。交換を促進せむが爲には單に或る種の消費を外間から刺戟し强制するのみでは充分でない。それは、一方で生産する所のものを他方で破壞し去るに止まり、毫も發展性を有しない。右の目的の爲には、世人が消費を擴大せむとするの希望を抱懷するあらむことを必要とする。世人に此の希望があらば、それに驅られて購買の資力を一層多大に獲得せむとして産業に努めるに至らしめられる。「人をして、購買の資力を得しめむが爲に生産を刺戟し以て恆に反復せられ又家族の幸福を助長するが如き消費を生ぜしめる所のものは、一國の一般的・恆常的の欲望に外ならない」(10)。而も此の欲望の存在發展は、文化の向上によつてのみ得られる所である。セイは此の種の事を市場理論からの推論の第四として述べて居る。

最後に、交換促進の効果を有するものとしてセイの力說して居る所のものの一つは、生産費の低落と云ふことである。産業の完成發達によつて「生産者が從來よりも僅少なる費用を以て生産物を作り得るに至れば、其の秘密を保ち居る間は生産者が利益し、而も何人にも損失せしめることはない。併し其の技術が外間に漏洩し、競爭が生産者をして生産物を低落せる生産費と同じ程度の價格で賣るの已むなきに至らしめるときは、同額の利益は消費者が、即ち一般公衆が取得することになる。故に總べての資産は此の物に就ては豐富を增したことになり、之を一層多量に取得することをも得べく、又他物を一層多量に買入れることをも得るに至る(11)。茲に、交換が擴大されるの可能性が生ずるのである。而も始めは低落せし一二の生産物に就てのみ富を增したる消費者の資産は、一切の生産物に就て其の富を增したことになる(12)。斯くして社會を構成する人々は、其の消費せむとする物の一又は他を從來よりも僅少なる費用を以て獲得し得る度毎に、益々その富を增すことになる(13)。交換擴大の可能性は、社會の何れかの部分に發明發見があり、生産費が低落を來す毎に、全社會に亙つて擴大される。セイは右の點に多大の重要性を認め、「富は所有物の價値より成るも、物が低價であるほど益々一國は富むこととなる」てふ「經濟學上に於ける最も困難なる問題の解決」を其處に發見して居るのである(14)。

（1） Traité, Liv. I, ch. 21. (p. 240.)
（2） loc. cit. (p. 242)
（3） loc. cit. (p 241)
（4） op. cit., Liv. I, ch. 15. (p. 139)
（5）(6） loc. cit. (p. 141)
（7） loc. cit. (p. 142)

(8) loc. cit. (p. 144)
(9) loc. cit. (p. 145-6)
(10) loc. cit. (p. 146-7)
(11)(12) Cours, IIIe Partie, ch. 5. (p. 173)
(13)(14) loc. cit. (p. 174)

所謂る農村問題の實態

氣賀勘重

一

農村窮乏の聲は由來既に久しく耳にする所であり、之が救濟を目的とせる農村問題解決の手段方策も亦多年來常に論議立案された所である。けれども其聲は最近に至りて殊に喧しく、問題の解決に關する各種の手段方策實行の要求は昨年以來特に甚だしきを加へ來つた。而して喧々囂々たる農村論者の議論と提議とは、近年著しく其巧妙を加へ來れる農村運動者農村政治家の活動と相待ち、世界的大不景氣に當面せる一般經濟界の不安に乘じて社會各方面に大々的感動を惹起し、社會公衆をして恰も農村全般の危機焦眉の急に迫れるものゝ如く、若し今日に於て忽遑救濟の處置を施すに非ざれば如何なる危險の勃發するやも計られざるが如き感を抱かしむるに至つたやの觀がある。是に於てか識者はそれ〴〵更に適當なる對案施策の檢討と提唱に熱中し、政治家殊に農村關係の政治家は各其所信に從つて各種對策の實行を當局に迫らんとし、政府當局亦此風潮に驅られて只管應急恒久の對策實施に努力するに至つた。斯くて所謂る非常時政界の問題は外に對しては滿蒙及び對支の問題に集中し、內に在りては農村救濟問題